

特定非営利法人 自立応援団

様

2018年12月
第12回 卒後を考える全国交流会 in くまもと
実行委員長 衛藤陽一

全国交流集會にあたっての協賛に関するお礼

時下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

「障害があっても地域で楽しく生きる会」は、障害のある人たちが、障害のない人たちと共に暮らすことができる社会を目指して、障害当事者とその家族、関係者たちで2007年に結成されました。この会の母体は「障害児を普通学校へ・全国連絡会」ですが、今は独立した別組織として活動しています。

厳しい現実と向き合いながら、各地で実践している活動を語り合い、問題を共有し、困難を抱える私たちが互いに支え合うことを目的にして、1年に1回全国集會を開いてきました。

そして、去る11月17, 18日に熊本学園大学を会場として「第12回 卒後を考える全国交流会 in くまもと」を開催し、全国各地より180名を超えるご参加をいただき、無事に終了することができました。

開催に当たっては、本集會の趣旨にご賛同いただきまして、貴団体より御協賛をいただきましたことに心よりお礼申し上げます。

今後ともご支援ご協力を切にお願いいたします。
誠にありがとうございます。

第12回 卒後を考える全国交流集會 in くまもと
現地実行委員会事務局

くまもと障害者労働センター内
〒861-8039
熊本市東区長嶺南1丁目5-40
TEL : 096-382-0861
FAX : 096-285-7755

ももか 意味あった17年



松橋支援学校での運動会に参加する橋村ももかさん(手前)と母親のりりかさん(左)。学校生活を生き生きと楽しんでいます。宇城市(橋村さん提供、写真は一部加工しています)

医療的ケアが必要な子どもを持つ保護者グループ「虹色の会」の橋村りりかさん(46)＝益城町＝は9月、脳性まひの長女ももかさん(当時17)を亡くした。障害者が地域の中で当たり前に暮らすことができると訴え、求め、母娘の二人三脚で声を上げてきた。突然の別れだったが、りりかさんは「どんな人も暮らしやすい社会になるまで、伝え続ける」と強い決意をにじませている。

脳性まひの長女亡くした橋村さん (益城町)

「地域の中で大きく成長」

こもれびの詩

ももかさんは移動に大きな車いすが必要で、言葉が通じることができなかったが、地元の津森が、木山に

通ったりりかさんは当初、つまずきながらも小学校入學から1週間で、先生から「学校に任せようぞい」とあっさり言われた。友人は頼って車いすを押し、ももかさんが寝てしまえばたまに慰めをくれた。毎朝、友人が迎えに来ると、ももかさんは目を輝かせて登

校。勉強だけでなくスポーツも校外活動も積極的に満喫した。1学期は子どもたちと先生の世界感を交わした。ももかも友人に誘われ、友だちと遊ぶようになった。2016年4月に襲った熊本地震で息子は命を失った。ももかさんは、松橋支援学校(宇城市)に進学したばかりだった。被災した橋村さん

一家を養ったのは地域の人が。避難所では「ももかさん、元気だったね」と声を掛けられ、車いすのスペースを確保してくれた。町内にはバリアフリーの仮設住宅も建設されたが、一家は迷わず慣れた親しんだところが住むテラス団地に入ることを選んだ。地震から3カ月が過ぎた時、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害される事件が起きた。りりかさんはももかさん

と一緒に県内の選挙集會に出席。「言葉が通じなくても、障害者は豊かな感情を持って生きている」と訴えた。りりかさんはやまゆり園の事件を、旧優生保護法や、「性的少数者のカップルは生産性がない」とした国会議員の姿勢にもつながる問題だと感じている。「一緒に大きくなれば、障害者を『不幸な存在』と考えることはない」と強く思うようになった。りりかさんが、保護者仲間とともに「虹色の会」を設立したのは17年。医療的ケアが必要な子どもたちが、地



例顔見世興行」 京都・南座

域の学校に通えるようサポートを続けている。ももかさんを遺した約3カ月後、りりかさんは熊本で開かれた障害者の生活を考える全国集會に参加した。傍らにももかさんの写真や遺品、地域の中で生きることを誓った娘の17年がいかに大きな意味を持っていたか、涙で言葉を詰まらせた。「障害があっても、たちが地域で成長するのは特別なことじゃない。ももかが歩んだ道を後継させず、次の子どもたちにもつなげたい。それは私が一生をかけてやらなければいけない。ももかが私に残してくれた価値です」 (清島舞紗)

障害者自立 親が元気なうちに

「寝たきり芸人」として人気を集める「あそどっぐ」＝本名・阿曾太一さん(39)は、合志市で10年余り1人暮らしをしている。そのきっかけは母親が突然、海外赴任中の父親の元へ引っ越したことだった。11月下旬、熊本市で開かれた障害者の地域生活を考える全国集会では「親離れ、子離れ」をテーマにユニークな人生を笑いを交えて語った。(清島理紗)

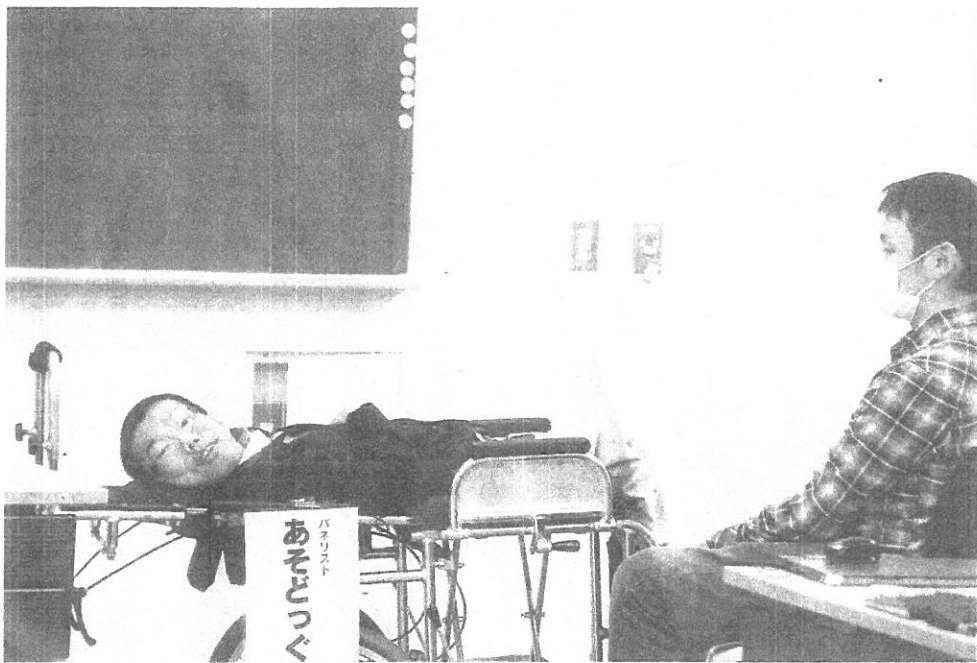
「寝たきり芸人」あそどっぐさん(合志市)

あそどっぐさんは、生まれつき筋肉が萎縮し、動かなくなる「脊髄性筋萎縮症」。両親の介助を受けながら育った。26歳のころ、サラリーマンの父親がタイ・バンコクに転勤。1年ほどは単身赴任をしていたが「海外の1人暮らしは大変だ」と言い出した。それを受けて母親が何の前触れもなく、「私、決めた。タイに引っ越す。あとはお願いね」と宣言。まもなくタイに旅立った。

あそどっぐさんは、生まれつき筋肉が萎縮し、動かなくなる「脊髄性筋萎縮症」。両親の介助を受けながら育った。26歳のころ、サラリーマンの父親がタイ・バンコクに転勤。1年ほどは単身赴任をしていたが「海外の1人暮らしは大変だ」と言い出した。それを受けて母親が何の前触れもなく、「私、決めた。タイに引っ越す。あとはお願いね」と宣言。まもなくタイに旅立った。

あそどっぐさんは、生まれつき筋肉が萎縮し、動かなくなる「脊髄性筋萎縮症」。両親の介助を受けながら育った。26歳のころ、サラリーマンの父親がタイ・バンコクに転勤。1年ほどは単身赴任をしていたが「海外の1人暮らしは大変だ」と言い出した。それを受けて母親が何の前触れもなく、「私、決めた。タイに引っ越す。あとはお願いね」と宣言。まもなくタイに旅立った。

あそどっぐさんは、生まれつき筋肉が萎縮し、動かなくなる「脊髄性筋萎縮症」。両親の介助を受けながら育った。26歳のころ、サラリーマンの父親がタイ・バンコクに転勤。1年ほどは単身赴任をしていたが「海外の1人暮らしは大変だ」と言い出した。それを受けて母親が何の前触れもなく、「私、決めた。タイに引っ越す。あとはお願いね」と宣言。まもなくタイに旅立った。



「親と適度な距離感があることで、より良好な関係になった」と話す「寝たきり芸人」あそどっぐさん＝熊本市中央区

熊本市で全国集会 生活楽しみ、より良い関係

親の急な決断から始まった1人暮らしだが、ちょうど良い時期だったという。

「親元で暮らし続けていれば、親はやがて高齢になり、動けなくなる。親も寝たきりになってから『あとはお願いね』と言われても、それはつらい。お互い元気なうちに思い切って決断できて良かった」

家族の関係もより良くなった。親の介助に頼っていれば、やりたいことがあっても、まずは親の負担を考えてしまう。でも、プロのヘルパーなら遠慮せずに頼める。あそどっぐさんが自立したことで、両親も自由な時間を持てるようになった。母は最近、ゴルフばかりの毎日。そんな様子を見るのは息子としてとてもうれしい。

障害者の友人に「子どもものころ、ずっと早く死ななきゃと思っていた」と打ち明けられたことがある。親が高齢になって介助できなくなったらどうしたらいいのか、考えると不安でたまらなかったからだという。

しかし、その友人はあそどっぐさんが自立した生活をしていることを知り、考えが変わったという。実はあそどっぐさんも以前、全く同じ思いを抱えていた。そんなあそどっぐさんを勇気づけたのは、1人暮らしをしている障害者の先輩の姿。「死ななくていいんだ」と考えられるようになったのだという。

障害がある子どもたちが自由に暮らせる社会になるためには、「僕たちが地域社会で楽しく暮らすことが重要だ」。「寝たきり芸人」が語った生きざまには、強さと笑いがあふれていた。「親は親、子は子、お互いの生活をエンジョイできるように、ちよつとよい距離感で過ごすことが大切だと思います」

がなと任切な身て解除しよ

任意後見契約の解除

知る知一便

障害者の結婚、出産 清島 理紗 (文化生活部)

脳性まひの女性と高次脳機能障害の男性が結婚し、間もなく赤ちゃんが生まれると聞き、取材をした。2人が子育てをするには多くの支援が必要で、ボランティアを求めているからだ。

記事にして約3カ月後、障害者の地域生活を考える集会で、2人が動く「くまもと障害者労働センター」の利用者たちからこんな声を聞いた。

「障害者は結婚すると思われていないのでは」

障害者の自立生活を支援するセンターでは、スタッフが利用者を変えて月2回、ざっくばらんに運営などを話し合う。重い障害がある2人の決意をきっかけに、障害者の結婚や出産、子育てなどについてあらためて具

体的に議論して考えたという。取材をした時、2人は見つめ合い、「これからちゃんと子ども面倒を見なきゃね」と笑いつつ合った。仲の良い、どこにでもある幸せなカップルに見えた。それだけに「障害者は結婚する

取材前線

と思われていないのでは」という問い掛けは、記者自身が障害者の結婚や出産、子育てを「普通のこと」として捉えられていることがあつたことあらためて突きつけられた。

センターの職員も「出産、子

育てを控えて福祉サービスの増量などを行政や病院に相談すると、初めてのことでからと言われ、なかなか対応が進まなかった」と振り返った。障害者が当たり前結婚を選択できるようになるには、事例を積み上げるのが大切だと感じたという。

2人の間には9月下旬、長女が生まれた。父親になった男性が誇らしそつに見せてくれた赤ちゃんの写真を眺めながら、自分の子どもが生まれた時のことが頭に浮かんだ。障害があつても結婚や出産、子育てができ、子どもが幸せに育つためには、どんな社会の在り方が求められるのか。考え続けていきたい。

2018.12.5